

<真っ白なレース編み>を想わせるノリウツギの紹介がやや遅れました。円錐形の花序の周りに真っ白なアジサイのような装飾花が付いている 20 cm ほどの花は 6 月末から 7 月始めには緑の中に際立つ清楚さでした。名前の由来は和紙を漉くときにこの木の樹液を糊として使ったからだとされています。先にも触れましたが花からも想像できるようにウツギではなくアジサイの仲間である糸雨 (いとさめ) に似あいます。



<ノリウツギ>

<紫の花>がふたつ、レースの白と入れ代わるように登場しました。ひとつはムラサキシキブで、小さな花が枝先に向かって順繰りに咲いていきます。秋には 3 mm ほどのまん丸でやや薄い紫色の実をびっしり付けることでしょう。源氏物語の紫式部とは関係なく、敷き詰めるように紫の実が生るという意味の“紫敷き実 (ムラサキシキミ)” から変じたとのこと。



<ムラサキシキブ>

もうひとつはミソハギで穂状に紫の花を付けています。ひとつ一つの花は 6 弁で、中心のすっと伸びたメシベに貼りつくようにオシベが取り囲んでいます。祭事で清めに使ったことから、名前の由来は“禊萩 (ミソギハギ)” とのことです。花時の地上部を刈り取って干したものは「千屈菜」という下痢止めやあせもの治療用の民間薬だそうです。植物に含まれるタンニンなどが効くのでしょうか。



<ミソハギ>



<ヤマユリ>

<梅雨明け>から入道雲の湧き上がる空に似あうのがヤマユリですね。随分少なくなった花ですが幸いにもビオトープの東斜面に 3 輪咲いています。花径が 20 cm にもなる豪華な花です。顔を近づけると花からは実に濃厚な香りがしてきます。花の大きさに比べ茎は細くかろうじて花を支えている感じがします。ユリの仲間は概して葉や茎に比べ花が大きく立派ですね。そういえば「蠨螂の斧と

はいはじくるまゆり」という句がありました。

<夏の道端>にはヒルガオでしょう。写真を見るだけで入道雲、アブラゼミやキリギリスの鳴き声、そして昼下がりの気だるさが浮かんできます。今、ビオトープには少しだけ咲いています。(文と写真: 松本正勝) <ヒルガオ>→

